

---

# クリスマス妖怪

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマス妖怪

### 【Nコード】

N3029D

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

クリスマス、子どもにプレゼントを買ってやれない男の前に、不気味な子どもが、どこかへ導かれるのを見る……。

サンタクロースという人を知っていますか？ 勿論みんな知っているでしょう。

知らない人は、本当に地球に生きている人間なのでしょうか？と問いたくなるかもしれないくらい、サンタクロースというの是有名です。

しかし、サンタクロースという人はすごいですね、一日で世界中の子どもにプレゼントを配ってしまうのですから。

「……」

でも、勿論大人になられた皆さんは存じているでしょうが、サンタクロースというのは、実在の人物ではありません。

当然ですよ、そんな人間がいたら、世の中の宅配業者の方々は路頭に迷ってしまうことでしょうから。

ここにいる二十歳代の、結構どこにでもいそうなサラリーマンがいます。どうにも浮かない顔をしているようですね。

それもそのはず、平社員であるこのサラリーマンの方は、お金がなくて子どもに物を買ってあげられないのです。

「父さん、駄目な奴だな……」

今にもおいおい泣き出しそうな顔で、彼は子どもに対する詫びを述べていました。

「せっかくのクリスマスだっていうのに、何も買ってあげられないなんて……不景気のせいになりたいけど」

彼は、ふいに玩具屋に入っていく、自分より凛々しそうな会社員風の男を眺めました。

その男は、十分ほどでその玩具屋から出てきました。もう目星つけてあったのでしょうか。

出てきた男の人の手には、クリスマスの包装がされた玩具が入っていることがよくわかるような、透明性の薄い袋が手にぶら下がっていました。

なんだかとても大事そうに、それでいて嬉しそうな顔をしています。恐らく子どもの喜ぶ顔が目に見え、思わずニコニコしてしまっているのでしょう。

男の表情を見て、さっきのサラリーマンは、とても羨ましそうに、それでいて悔しそうにしていました。

でも、自分ではこの格差をどうすることも出来ません。大して業績が良いわけでも無い男には、あんな普通の人間が掴んでも良いだろう幸せすら、許されていません。

「帰ろう……」

とてもガツカリしながら、男は帰路へ着こうとしました。

子どもに一体どんな言い訳をしよう、と考えながらの、とてもとても憂鬱な帰路でした。

しかし、そんなガツカリした雰囲気全て打ち払うような、不思議な光景を男は目にしました。

「あれ？」

子どもです、子どもが歩いているのです。ここは繁華街と言っても過言ではないような都会です。

そんなところに、小学生にも満たないような子どもが、たった一

人で歩いているのです。

迷子かなと思いましたが、その足取りはとてもしっかりとしています。というより、迷子ならとくに泣き喚いていても、おかしくはありません。

何か、明らかに不思議な様子をしている子どもを見れば、流石にネガティブまっしぐらだった男の心だって惹かれます。

「何してるんだ？」

当たり前の疑問を抱きつつ、男は子どもの後を追いました。子どもはどんどん人気のないところへと向かっていきます。

追っていくうちに、辺りは段々と霧のようなものに包まれていきました。その霧はどことなく冷たく、男の恐怖心を煽りました。

そんな恐怖心を拭いながらも、男は迷い無く進んでいく子どもを、必死に追いました。

自分でも、一体どうしてこんなことをしているか、全くわかりませんでした。

そして、とても眩しい光に包まれた時、景色は夢のように変貌したのです。

辺りは一面の銀世界。遠くの風景に森らしいものが見えるような都会とはまるつきり情景の違う、雪原がありました。

そんなところに、男はいつの間にか放り出されていました。後ろを振り返っても、今まで来た道はありません。

気づけば先ほどまで追ってきた子どもすらも、どこかへと消えていました。

ここはどこなのかと、ただ呆然と見渡してみると、目の前には人

家らしい、山小屋のような小さな家が建っていました。  
人家には、とても暖かそうな灯火がついていました。

「寒い……」

男は冷静に今の状況を分析しようとしたが、その前に寒さが彼を襲いました。

「とりあえず入れてもらおう。ここはどこかも聞いてみよう」

兎にも角にも防寒をしないことには、彼も終いには凍え死んでしまいます。

彼はひとまずその家に非難させてもらうことにしました。

「ごめんください」

「はい」

明らかにシワ枯れた老人の声が聞こえてきました。とても優しく、うな霧囲気を漂わせながらも、それを通り越したお人好しの声にも聞こえます。

男は、これは助けてもらえるかもしれないと、期待を寄せました。

「ここらで迷ってしまいました。道もわからないし、防寒具もないので、どうか火に当たらせていただけないでしょうか」

「それは大変だ。どうぞ中へ」

あつけなく小屋の中に入ることを許された男は、これは幸運だったと小さく神と老人らしい家主に感謝しながら、家に入っていきました。

「狭いところですが」  
「……」

老人は、そういつて暖炉に男を誘導しようと手を差し伸べました。しかし、男は目を見開いたまま、動きません。

不思議に思った老人が、彼の顔を覗いながら、どうしたのかと訪ねます。

男は、間抜けな顔をしながら、老人の姿を指差して、一言言いました。

「サンタクロース……？」

「そうですよ」

「ここは一体……どこですか？」

「強いて言うのなら、サンタの世界ですよ。まあとにかく、火に当たりながらお話しましょう」

そういつて、サンタクロースと名乗る老人は、男を暖炉まで誘導しました。

終始招かれた男は、信じられないような顔をして、キョロキョロと辺りを見渡していました。

「あなたは、サンタの世界に迷い込んでしまったようですね」

「その、サンタの世界というのは、どういうことなんですか？」

「大きくなると、子どもはサンタクロースというものは、本当はいないんだと知られますね」

「それが私の世界の常識ですが……」

「実はそんなことはないのです。この通り、サンタクロースという者は存在しています」

「まさか。いつも子どもの希望を買い与えているのは、私達ですよ？」

自称サンタは、フウツと息を吐いて、天井を見上げました。そして、また男に向き直ります。

「私達の本当の仕事は、子どもにお金でプレゼントを買い与えることではありません。あなた方が買ったプレゼントに、夢の力を授けることです」

「夢の、力？」

「そうです。夢の力というのは、眠って見る夢は勿論、将来なりたい夢とか、明日叶えたい夢とか、そういう感情を、いつまでも途切れることがないようにするための、不思議な力なんです」

「そんなことを、サンタさんはされていたのですか……」

「まあ、それがいつの間にか伝承が変わって、プレゼントを買い与える者達ということになっているのですよ」

男はそんな壮大な話を聞いて、思わずなるほどと頷きました。

「でもそれって人間の出来るようなことではありませんよね？」

「ええ、私達は単刀直入に言えば、人間という生き物ではないでしょう。あなたの方の国で言うところの、『お化け』や『妖怪』、あるいは『化け物』の類と言えるでしょう」

「そんな、サンタさんを化け物だなんて……」

「さらに言うと、我々のこの力は、プレゼントや子どもに触れて初めて注げるものです。それで一つ一つの家を回っては、こっそりと窓や煙突から入って、子ども達に夢を与えているのです」

「知りませんでした……でも、我々というのは、トナカイのことで



すか？」

「いいえ。流石に一人のサンタクロースだけで世界中を回るのは不可能ですよ。ですからサンタというのは私以外にもいるんですよ。この小屋の地下にたくさん。クリスマスの日が来るまで、毎年冬眠みたいなことをしているのです」

「なるほど、そうやって一年間生気を養っているというわけですか」

サンタクロースの話を聞いていて、すっかり感心していた男は、自分がここに来た経緯をすっかりと忘れていました。

そして、しばらく話し込んでいるうちにようやく思い出した彼は、子どもがこっちの方に来なかったかと、サンタに聞いてみることにしました。

するとあっけなく、その答えは返ってきました。

「そこにいますよ」

「え？」

サンタが指差した方向を見ると、そこではさっきまで彼が追ってきた子どもが、気持ち良さそうに眠っていました。

男は、それを見て何故かホッとなりました。そして、どうしてこの子どもが導かれるように、ここにやって来たのかも全て納得がいきしました。

この子どもは、きっとこのサンタの世界に導かれてしまったのでしょう。だから少々虚ろな様子でここまで来て、結局疲れ果ててここで眠ってしまったに違いありません。

「微笑ましいですね」

「ええ」

「きつと、サンタさんを信じてここまでやってきたのでしょうか。健気なものです」

「それは違いますよ。この子は、私が呼び寄せたのです」  
「……え？」

男は、サンタの言ったことがわからなくて、突然固まりました。

「サンタはたくさん居ます。しかし、私以外の者達は皆、元は人間なんです」

「それは……どうして？」

「こうしてサンタ候補を密かに連れてきて、育成しているからです」  
「……それは、勿論保護者の人間に承諾してのことですよね？」

その質問に対して、サンタは平然と答えました。

「そんなことあるわけじゃないですか。好き好んで子どもをサンタにする人間なんて、いませんよ」

「で、でも。こうして毎年子どもをサンタにしてるんですよね？」

「それじゃあ人さらいじゃないですか！」

「大丈夫ですよ。サンタ候補になった子どもは、この世界に来た瞬間、家族や友達等、向こうの世間の記憶から消去されます。あなたは、この世界にいるからまだ覚えていられているだけで」

「……じ、じゃあ、知らないうちに……私達人間の子どもは、こうしてサンタに……？」

サンタが話した衝撃の事実には、男はしばらく茫然自失していました。

もしかしたら、自分達が記憶を消されただけで、実は自分にも、友人にも、もつと子どもがいたかもしれないのです。

自分達は、何も聞かされないうちに、気がつかないうちに、子どもを失っているかもしれないのです。

「さて。事情を話した所で、あんたも元の世界に帰さないといけませんね」

「ちよつと待つて下さい!!」

「その様子だと、この秘密を世間に公開してしまいそうなりで、あなたの記憶も抹消しないといけないんですよ。ただ、あなたの記憶をその場ですぐ消すためには、少しやらないといけないことがあるんです」

「……なんですか」

「あなたの家には、お子さんが一人いらつしゃいますね。その子をサンタ候補にしないと、あなたの記憶、消えないんです」

「ええっ?!」

男の顔から、急に冷や汗が出た。そして、彼はサンタにすぐさま詰め寄ります。

「冗談じゃない!! 俺の大切な子どもを、どうして候補にしないといけないんだ!!」

「別に良いじゃないですか。どうせ記憶は消えて、あなたには元々子どもが居なかったことになる。子どもの所有物やら何やらは残りますが、それが誰のものは、わからず終いです」

「酷い……酷すぎる!! それで夢を与えているつもりなんですか? 私達の夢も希望を奪っておいで、それがサンタクロースなんですか!!」

死に物狂いで突っかかる男に対して、サンタはさも当然のようにこう言いました。

常識じゃないか、そんなことと、相手を非常識な者と掃き捨てるように、とても冷静に言いました。

「そうですよ。私達が夢を与える力を使うには、子どもの夢の力が

必要ですからね、こうして人間は日々いろんな場面で活躍して、進化しているんですよ」

「こんなこと……許されるものか!!」

男は、いつそのサンタを殴り殺そうと思って、椅子を持ち上げました。でも、持ち上げたところで彼の動きは止まりました。

というより、止められてしまっていました。何事かと思って男が振り向いてみると彼の身体は、押さえつけられていたのです。

どこから沸いてきたかわからない無数の子ども達と、笑顔のサンタ達によって、ガツチリと押さえつけられていたのです。

それを見た男は、何か恐ろしいものを感じて、それらを振り払おうとします。でも、力が強いうえに人数が多くて、どうしようもありません。

「さて、そろそろあなたの子どもさんが来る頃です。すれ違いにあなたが家から出れば、全ては無かったことになります」

「嫌だ!」

「ワガママ言って貰っては困ります。あなたがこの秘密を話さないという確証はないですし、それにここに勝手にやってきたのは貴方ですから」

「い、嫌だ!! 息子を忘れたくない!!」

「諦めてください。世界の夢のためですか」

気づけば、男はもう扉の前に立たされていました。一人の子どもが、扉を惜しげもなく開けます。

扉の向こうは、銀世界ではありませんでした。とても眩しい光の道でした。

その光の道の向こうから、一人の子どもが歩いてきます。男は、すぐに自分の子どもだと気づきました。

男は、子どもに手を伸ばそうとしますが、それより前にサンタの

部下達によって、突き倒されるようにして、扉から押し出されました。

倒され、下に落下する直前、男はこちらにやってくる自分の子どもの顔を、しっかりと見ました。目をよく見開いて見ました。そして、叫びました。

「絶対に忘れないからな！！絶対にいつか迎えに行く！！待っててくれ！俺の……………！！」

男は、気づくと玩具屋の前に立っていました。どうして自分でもここにいるのか、わかりませんでした。

きっと子どもが欲しくて、思わずこんなところに来てしまったのでしょう。男はため息をつきました。

子ども連れの客が、お店の中から出てくるのを見ると、男は逃げるようにその場を立ち去りました。

帰り道、ふと、繁華街の真ん中を、堂々と歩く子どもがいるのを見ました。

とても不思議に思いましたが、男は、なんだか関わってはいけなような心持になって、その子どもから目を逸らしました。

結局子どもは、人気のない方角へと姿を消しました。男は逃げるようにして家に帰りました。

家に帰ると、男の妻が首を傾げていました。

どうしてかと聞くと、妻は足元に置いてあつた玩具を指差します。男はギョツとしました。どうしてこんなものがうちにあるのだろう、と。

それだけではありません。さらに探してみると、子ども服などもあつたのです。

「きつと子どもがあまりにも欲しくて、こんなもの買い込んでしまったんだろう」

「そんな記憶ないんだけど……」

「お互い忙しかったからな。仕方ないよ」

「……うん」

男の妻は、寂しげに頷きました。何か引つかかるような物言いでした。

しかし、男も男で、どうしても玩具に気がいつて、その場を離れることが出来ません。

なんとなく、無意識に男は、その落ちていた玩具を手にもつて、まじまじと見つめました。

すると、どうしてか、男の目からは、ボロボロと涙がこぼれてきました。妻は驚きました。

きつと疲れているんだ、そうに違いないと、男は涙をこすりながら、ベッドまで逃げるように走りました。

枕に飛びついて、その涙が止まることは一向になく、しばらく男は、意味のわからない涙を流し続けました。

そんな夫を見て、妻もどうしてか涙が出てきて、夫の隣で泣き始めました。その涙は、結局一時間ほど止まりませんでした。

三年後、二人の間には、念願の『第一子』が誕生しました。

（後書き）

「サントさんって人間じゃないよね」という何気ない会話から思いついた一作。クリスマス記念ということで一日で書き下ろしてみました。ファンタジーとなっておりますが、微妙にホラーでしょうか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3029d/>

---

クリスマス妖怪

2011年1月15日22時50分発行